

カルシユ先生との出会いとこれから

東京医科歯科大学教授 若松 秀俊氏

次の文は若松教授から未知の白石磷氏（九文乙）に寄せられた書簡である。カルシユ先生は創設間もない松江高校に着任、昭和一四年まで教鞭をとられ、その間多くの文理乙類の生徒がドイツ語だけではなく色々な面で温厚な人格の薫陶をお受けしたことは周知の通りです。お読み頂くとよく判りますが、若松教授は昨年不思議な縁でカルシユ先生のことを知られ、この大人物を広く顕彰して世に出すことが自分の天命と思われ白石氏にこの書簡を送られた次第です。白石氏は数名の学友と図られ、自分達門下生にとっても有難いことと、この奇特な教授のことを同窓生にも報せたいと「翠松」に掲載を提案されました。読後ご意見提案のある方はお報せいただければ喜びます。

若松秀俊先生は東京医科歯科大学医学部医用理工学講座の教授、工学博士の優れた五三歳の学究の方です。本校の同窓の方ではありません。（編集部）

シュトゥットガルトの、とある小さなホテルで的一九九九年九月五日朝のこと、偶然が私

を故カルシユ博士に導いてくれました。それが彼との最初の出会いでした。階下のダイニングルームで同僚たちと朝食を摂っていると、上品な婦人が私の左斜め向かいのコーナーに座りました。彼女がふと私の方をみて微笑んだので、それに気づいた私はそのわけを尋ねると、彼女はそれに答えただけでなく、松江、横浜、東京、軽井沢での少女時代の暮らしを懐かしそうに語ってくれました。マールブルク在住の Frau Dr. Friederun Karsch（日本名・Hideo、六三歳）でした。話題は、一九二五年から一九三九年まで松江高等学校で教鞭を執っていた父君のことへと進展して行きました。再会を期して写真を取り住所を伺って別れ、話に興味をもった私は、帰国後に、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせましたが、同博士に関する具体的情報は殆ど得られませんでした。その後フリーデルンさんからカルシユ博士の履歴と業績の概略が届き、紹介された米国テネシー州に在住のお姉さんの Mrs. Mechthild St. Goar（日本名：Hoshiko、七十二歳）と連絡が取れたので、かつての彼の生徒とその縁者の住所を手がかり

に、カルシユ博士の足跡を順次明らかにする準備が整い、関連する土地に直接赴いて何を知ることが可能かを検討するようになりました。カルシユ博士がドイツ語、ドイツ文学、哲学の教鞭をとっていたことは、周知のことでしょうが、一九三九年に一旦帰国して一九四〇年再度来日してから、戦中戦後の混乱期に横浜一九四〇―四四、東京一九四四―四五、軽井沢一九四五―四七に居住しました。その間ドイツ大使館に勤務し、外交官として両国の友好関係に尽力しております。松江では文豪小泉八雲氏のこと何びとにも顕彰されていません。もちろん彼の文学的業績・日本への貢献からいってこのことは当然ですが、カルシユ博士の一四年に及ぶ松江の滞在期間と外交官としての東京滞在八年間から言って、松江や松江高等学校については日本で果たした功績の大きさは、彼の門下から輩出した各界の著名人とその業績を見れば、誰にでも納得できることです。また日本の哲学や宗教の研究家としての業績、知日家外交官としての功績が十分に推測されます。戦前、戦中、戦後の混乱に紛れて彼の業績が散逸し、ドイツでも十分に時間がとれず、その後日本に戻る機会があっても、なおまとめるに十分ではなかったことと、混乱期にあって彼の事跡を記録として関係者の誰も留め置くことができなかったのが、今にしては松江では僅かに彼と関係のあった人にしか、その事跡が知られていな

い大きな理由でしょう。彼の足跡を是非明らかにし、埋もれた彼の功績を客観的な方法で発掘し、世に明らかにしたいと思っています。私が調査を進める中で、カルシュ博士が当時の日本を深く愛し、日本人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく学徒に与えたことは明白な事実です。それ故、まず松江の人々にこの偉人を知ってもらい、広く日本人々にも知ってもらえるような環境を整えたいのです。また、外交官としての友好の証も周辺の関係者の証言とともに明らかにし、日本とドイツの友好にも役立ててみたいと思っています。また、彼の未整理の研究を世に出し、札幌農学校のクラーク氏や文豪小泉八雲氏に注ぐ眼と同じ高さから、公平で客観的な眼でカルシュ博士のすべてを評価してあげたいのです。このための具体的な方法を現在思案中です。そもそも、何の縁もなかった私がなぜこのカルシュ博士にこの様にこだわるのか、なぜこんなに彼の呼びかけに私の心が騒ぐのかは、自分でもよくわかりません。ともかく、総合的・系統的な形でカルシュ博士の周辺の客観的状况を示す資料をできるだけ集め、彼の業績と日本との深い関わりを短期間に一気に明らかにし、それを根拠にして、公的な組織例えば、島根県や松江市の教育委員会、島根大学、また地元の報道機関とも連携し松江市民、さらに島根県民、日本人々に彼の存在を明らかにしたいと思っています。彼に

とって運命の地の松江で、ヨーロッパの精神を学徒に伝え、同時に自らの精神生活を磨きあげたこと。また、自分のライフワークとして人知学的に見た東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残し、さらにドイツ大使館での外交官としての仕事を通じて日本の混乱の時期をも経験し、最終的に一九四七年帰国したこと。また、後になって、彼が出雲大社で神々に感謝の言葉を述べ、人生の終末時に少年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺の景色に見ることができたと語っていた彼の心情に私は深く感銘しております。彼自身の手になる戦前の絵画や写真は、松江の文化財として市に寄付を約束されております。折しも今年はドイツでは「日本年」です。彼の未整理の原稿には日本に関する記述も見いだされるでしょ

う。そしてドイツで教育に携わっている人の協力や、ドイツ関連の公的機関の協力もやがて得られると思われれます。これらのことが順調に進められるように、関連する方々からご尽力を賜るよう心より願っております。私は一九七三―一九七五年にドイツ学術交流会の奨学生としてドイツ政府より給費を受け、エルランゲンニュルンベルグ大学で研究生生活を送ることができました。現在もドイツ学術交流会と密接な関係を維持しています。多感な若き日にドイツの文化とそれを生んだ風土に触れる機会をドイツから与えられた私がドイツでの公務期間に偶然にもこのような形でカルシュ博士の娘さんにお会いできた仕事に関わることになったのは、私に賜った天命と感じております。

10期文甲（昭和5年〜8年前後）

青春彷徨―在時茫々の記

(三)

赤木正久（10文甲）

四、高橋元雄のこと

部||同期では矢部兵馬氏、江維敦氏が同部員

（理甲2・東京八中・昭14東工大機械、平成10年9月30日没、松江では陸上競技部・馬術

昨秋十一月末高橋氏夫人より元雄氏九月末逝去につき賀状欠礼との御挨拶状を受けた。